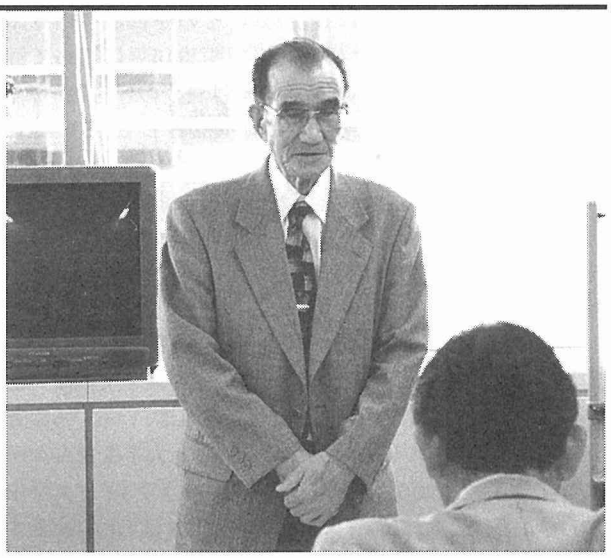
札幌会場

松浦武四郎の見た石狩

【1】8月7日(火)　14：00～15：30
【2】8月8日(水)　13：15～14：45

講　師
松浦武四郎研究会会長
秋葉　実



1

松浦武四郎の著作などから引っ張り出しまして、雑談を交えながらお話ししてみたいと思います。私と松浦武四郎とのかかわりは昭和38年頃からですが、武四郎は、非常に多くのアイヌの人から話を聞いておりますけれど、私は主に旭川と釧路の方などです。10年ほど前に亡くなりましたが、阿寒に山本多助さんという方がいらっしゃいました。この方は、釧路の惣乙名(そうおとな)の子孫ということでして、非常に鼻っぱしの強いおじさんでした。20年ぐらい、お付き合いしました。この方が、10冊ぐらい本を書いております。その中の1冊、昭和49年に書いた本の中に、松浦武四郎という二本差しが、昔、私の先祖が屈斜路コタンにいた時に、やってきた。のこのこって入ってきて、何か食べ物ないかと言った。ひこ祖父さんが、家へ入るのに被り物を取らないで、その横柄な口を聞くとは何事だと、怒鳴り返したら、改めて出直して来たんで、干魚を何匹か分けてやった、というように書いてました。

これは実は、安政5年5月、松浦武四郎が屈斜路の方へ行った時に、食べ物が何かの手違いで来なかったんです。1週間ぐらい、米の飯を食べないで、魚とか、干魚とか、食べてたんですが、それも屈斜路コタンへ行った時には無くなってしまった。それで、屈斜路の乙名の家へ行って、その時は小田井蔵太同心がお金を出して、食べ物が無くなったので、何か分けてくれぬかと言ったところが、そこの家主が、うちらも非常に今困っているから、あんた方にやるだけの食糧はないと、断わられたんです。武四郎はこれを見て、刀の鍔を出して、済まんけど分けてくれと言ったところが、それじゃ分けてやるとなった。蝦夷地には、お金が通じなかったんです。たぶん、小田井は見下げたような言い方をしたんだろうと思うんです。それで断られた。ということが、松浦武四郎の日誌に出ているんです。

その日誌が出て2、3年経って、多助さんが食堂をやっている阿寒へ行ったんです。昼飯を食べていたら、多助さんが、「俺は間違ってたな。松浦武四郎っていう人は、アイヌの味方だったんだな」。…いつも、シャモの悪口ばっかり言ってる人だったんですが、あっさりとそう言ってくれた。やっぱり多助さんは、鼻っぱしは強いけれども、アイヌの気持ちが残ってたんだな、ということを理解しました。

それからここに、豊岡さんのお嬢さんがいらっしゃいますけれども、豊岡喜一郎さんという、私よりもちょっと若い年齢の方がいらっしゃいました。この話も20年ほど前ですが、アイヌは後進国人だ、文化が遅れてるって言うけれども、あんた方、日本人の先祖も同じじゃないか。100年ぐらい前には、都会ではいざ知らず、内地の田舎へ行ったら、みんながアイヌと同じ、草屋根に住んで、囲炉裏で薪を燃やしていた。アイヌには字がないというけれども、100年前の農村へ行けば字を知っているのは名主さんや、お寺の坊さんぐらいしかいなかった。100年前のアイヌの社会と変わりないんじゃないか。ただ、文化の違いだけだ。西洋人はパンを食べる。日本人は米を食べる。アイヌは、狩猟採集民族だったということ。西洋人は背広を着ていた。日本人は着物を着ていた。アイヌはアツシを着ていた。これだけの違いであって、後進民族だというのはあたらない、というような話で、なるほどなと思って、今でも覚えているんです。

それからもう一つ、平成6年に、武四郎の生まれた三重県の三雲町で、松浦武四郎記念館ができました。この記念館は本体工事が3億円、付帯工事を含めて5億円くらい。我々にとっては気が遠くなるようなお金ですけれども、工事としてはそうどでかいものではないですね。この落成式には、三重県の吉野知事、それから北海道の横路知事、(社)北海道ウタリ協会の野村理事長も参加して行われました。平成8年の第1回武四郎祭り、これは2月11日だったと思います。武四郎の生まれたのが2月10日で、亡くなったのが2月4日ですから2月に開いたんですが、行きましたのが前夜祭で、たくさん人が集っているんです。5、6百人くらい。何があるんですかときましたら、阿寒のモシリという歌舞団が全国を回っていて、大阪の国立民族学

博物館で武四郎祭りがあるということを聞いて、ここで公演させてほしい。一切、お金はいりませんということで、冬ですから暗くなるのが早いので、夜の6時から薪を焚いてやったんです。いわゆる純粋のアイヌの歌、踊りじゃなく、それを現代風にアレンジしてやった。迫力あるんですね、すごく。それから、踊り手も美人揃い。たかだか10人か12、3人くらいですが。こちらの主宰者が、豊岡征則さんといいまして、今も屈斜路でやっておりますけれども、歌舞の中間に、こう挨拶をしました。松浦武四郎は、悪い和人が多かった中で、たった一人アイヌの味方でした。それで本日は特にお願いして、ここで公演をやらせていただいているんです、と。そして第2部の公演をやりました。そうして終ったら、みんな感激しちゃって、拍手はもちろんですが、帰らないんですね。ざーっと5、6百人、あの寒空にお婆さん方もいました。それで豊岡征則さんは、困ったなぁというような顔をしまして、それじゃ皆さんで踊りましょうということになったんです。それで、音楽をつけて、その座員の人が円を描いて踊った。だけど、アイヌの踊りだからやはり皆さんちょっと遠慮して、出ないんですね。そうしましたら、三雲町長の黒宮さんが、真っ先になって入ったんです。そうしたら、皆さんずーっと後ろについて、三重くらいの輪になって楽しそうに踊った。いわば冬空の盆踊りです。町長も偉いですね。

そうやって万来の拍手で前夜祭が終ったんですが、次の日、いざ本番になりまして、私が館へ行きますと、50歳くらいの人が挨拶をしていました。それが北川正恭知事だったんです。しかし、知事がたかだか3億くらいの開館式に来たり、地方の一町村の、観光祭りとは違うんですが、そういったところへ顔を出して挨拶するなんてことは、ちょっとあり得ない。やはり町長の働きかけがよかったんですね。私にも何か話をしろということですから、館長室にいたら、ぞろぞろとお客さんが来ます。そのうち何人かが挨拶していくのです。私に挨拶に来たのかなと思ったら、そうじゃないんです。町長と知事に挨拶してるわけです。そうしましたら助役が、「秋葉さん、町会議員がみんな来ました。あ、そうじゃない。1人病気で寝てるから、14人のうち、13人全員来ましたよ」というわけで、これにも驚きました。私は他の町村にも講演等に回っているけれども、町会議員のみんなが私の下手な話を聞きに来るなんていうことは、ちょっとないんじゃないでしょうか。そういう私自体も、偉い人の講演会があっても、夜に出るのが大儀で、なかなか行かないので、偉そうなことは言えないですね。

今回の話は、こんなふうにまとめてみました。蝦夷地を松前藩の領地だと思っている方が、若い方に多いと思うのですが、実際は違うのです。松前の領地は渡島半島の一角だけであって、蝦夷地はあくまでもアイヌの人の土地だった。いわゆる保護国でした。徳川家康が、慶長9年(1604)松前慶広に対して、松前藩だけに蝦夷地と物物交換することを認める。その代わり、アイヌの人たちの介抱せよ、つまり困っているアイヌの人たちがいたら介護してあげなさいという義務を負わせたわけです。そうしまして、その時の取り決めは、干し鮭100匹に対して、米が30kgというのが交換比率の基準でした。それに合わせて、他の物価も全部、いわゆる為替相場と同じです。これは私も、軍の学校に行きましたけれども、30kgと言いますのは、普段背負って歩ける目方なんです。干し鮭100匹というのは、非常に高いですけど、これは川上で干し鮭を作りますから、それを丸木舟でもって浜へ下げて来る。帰りは米を舟に乗せて引っ張るか、あるいは背負って帰るかです。それで、これだけの交換率が出たんだろうと思います。

その当時は、和人を称してシサムと呼びました。サムというのは傍らの人。シは本当。本当の隣人というような意味で、アイヌの人は、シサムの船がやって来るのを、これは1年に1回ですが、首を長くして待っていたということを、釧路の番人が書いた本に載ってございます。

蝦夷地は米が採れなかった。本州ですと家来たちに、お前は厚田村百石とか、お前は石狩市5百石と与えてやれるんですが、松前藩は家来たちにアイヌの人たちと交易をする権利を与えたわけです。そうすると、その石高に応じて、1年に1回ずつ、その家来は、着物とか米・酒・煙草などを持っていって、昆布とか干し鮭とかを交易してきて、松前、函館、江差で、それを商人に売り渡し、その差額でもって松前藩士は食べていたわけです。干し鮭100匹と言いますと、かりに1匹1000円としても、10万円ぐらい。米30kgは、今の標準米の価格にしますと、だいたい1万円ぐらい。ですから、1万円対10万円ですが、米は、本州から船賃をかけて松前に持ってきて、松前の商人が上前をはねて、それをまた蝦夷地に持って行って交易するんですから、まあ、これでOKということになったんでしょう。その間に商人も儲けなければならないし、松前藩の藩士、殿様も食っていかなければならないということですから、10倍でも当たり前だったわけなんです。

ところが1680年、延宝の大飢饉がありました。米1石が0.76両から1.41両、1.85倍に上がったんですね。それで、何万人、何十万人という人が餓死したということで、松前に米が回らなくなってきた。

その頃に、場所請負人というのができました。というのは、武士の商法なんて言いますが、どうしても、商人にかなわないわけなんですね。今年は内地が不作で、米がこれだけしか来ませんということで、米の値段が上げられる。今年の昆布は出来が悪いですなってことで叩かれる。というようなことで、だんだん松前藩士は商人から借金をするようになってきたんです。挙句の果てに、1年に1回ですから、船が難破したらもう収入はゼロですね。商人から前借りしなければならない。いっそのこと、この交易の仕事、私どもにお任せ願えませんか。そうしましたら、アイヌの介護も私たちがやってあげます。内地がいかに不作になろうとも、昆布の出来が悪くても、年間100両なら100両、絶対おあげします。ということで、交易と介護の義務を商人に請け負わせたのが、場所請負制度です。これが1700年頃に、蝦夷地全部が場所請負になってしまいまし

た。

そうしますと、場所請負人は商人ですから、何かにつけて蝦夷人を小間使いにしたがるんです。そこで幕府は、正義の味方というわけじゃないんでょうが、元禄6年(1693)夷人を奴僕とするを禁ず、つまりアイヌを召使にしてはいけないというふれを出しています。時の将軍は5代将軍綱吉、犬公方といわれた人ですね。それから、賄賂で名高い老中は、柳沢吉保の時代でした。日本の国史で非常に悪くいわれ、我々が悪く教えられた人物は、裏返すと、非常に世界を見る目があって、現代であれば優れた宰相、老中ですね。柳沢吉保にしても、それから田沼意次にしてもです。じつは立派な人物だったんですね。賄賂はある奴から持って来いという方で、いただいたのは事実らしいのですが、政治感覚というものは非常に優れていたということが言えると思います。ですから、アイヌを召し使ってはいけないという布令を出しているんです。

先の、蝦夷人と交易することによって内地の米の生産が、漸次ですが、増えました。レジュメに出ていますように、1600年と1700年、これはその前後のを載せたのであって、1604年に1851万石だったのが、100年経つと、2591万石に増えた。これに150をかけますと現在のキロ数が出ます。私は古い人間ですから、石の方がわかりやすいんですね。メートル法と尺貫法の二つが頭に入ってますから、換算するのに、いちいち計算機を使わないとちょっと不便な面があります。若い方ですと、kgでないとわからないといいますし、私より上の方ですと、尺貫の方がわかりやすいという方もおります。

1700年代に入って間もなく、1719年ですが、松前地、いわゆる渡島半島の方でニシンが、大凶漁になりました。ニシンは魚にあらずと書きますね。漢字で。ニシンが北海道で獲れる時は、米があまりよくない。米が穫れなくなると、ニシンが来る。必ずしも、そういうわけではありませんが、やはり海流の関係だと思います、最近は米が穫れているけれども、ニシンがなかなか来ない。ニシンが来るようになれば、昭和20年の凶作みたいに、米が穫れなくなる。あの当時、私も、東京空襲で帰るところがなくなったんで、北海道へ帰ってきましたけれども、たいへんでしたね、米が穫れなくて。ところが翌年、ニシンが大豊作で、身欠きニシンとか、開きにして干してフキの葉っぱと煮たり、イモと一緒に飯の代わりに食べて、生きてこられた。あのときはニシンがなかったら、おそらく私は栄養失調でこの世に存在しなかったかもしれません。

それで1719年、松前の人たちが慌てた。ところが、先ほど言いましたように、幕府は、和人が蝦夷地に入って、蝦夷人の魚を獲っちゃいけないとしていた。それでいろいろ対策を協議し、幕府へお願いしたのはですね、松前の魚が蝦夷地に逃げていきました。来なくなったんでなくて、松前のニシンが蝦夷地へ逃げて行きました。だから、これを獲らせてくださいと。頭のいい人がいたもんですね。それじゃ、やむを得ないだろうということで、「追いニシン」という言葉を使います。ニシンを追いかけて獲る。当初は積丹とか、島牧とか、あのあたりだったんですが、だんだん、だんだん、奥の方へ行きました。ところが商人とか場所請負人が、行っちゃいけないんです。これは松前の人を助けるため、松前の人間が松前の魚を追いに行くんだから、漁夫でなきゃだめだよということで、漁夫が親方から船とか網を借りて、蝦夷地に逃げて行ったニシンを獲りに行くわけです。それで、2割を網元に納め、あとの8割を自分たちで分配する。これが「二八(にはち)取り」です。よく、文章に二八取り、あるいは二八小屋とかってありますが、これは追いニシンが始まりだったんですね。

蝦夷地には大きな船はありませんから、魚を海で獲ることはあまりしなかったんです。干し魚にする。旭川には荒井シャヌレさんという、明治24年生まれのお婆ちゃんがおりました。昭和52年頃、遊びに行った時に、そのお婆ちゃんが言うんです。今、新聞で、200海里とか何かって、騒いでいるけど、秋葉さん、おかしいと思わんかい。北海道の川に秋アジを上らせないで、カナダや、よその国へ行って魚を獲らせてくれという。おかしいじゃない。わしらアイヌはな、鮭が母の川へ帰ってきて、卵を生んで、一生の役目を終わらせたものを、天からの授かりものだと、干し鮭にして食べていた。だから、よくよくの天変地異がない限り、秋アジが無くなるということはなかった。なるほどなと思いました。それを今はみんな河口で獲ってしまい、母の川へ魚を上らせない。

今度はニシン漁、追いニシンをやっているうちに、秋アジに目を付けたんです。そして場所請負人は、アイヌの人は海へでて漁をしない。これをみすみす川へ上らせてしまうのはもったいない。これを獲ったらお国のためになるのではないでしょうかということです。試しにやってみようかということで、1733年、船運上っていうんですが、秋アジを石狩川で獲ることだけを請け負わせたんです。1780年になりますと、小林屋宗九郎という人が、石狩場所を請け負って、今度は自ら漁労に乗り出したんです。

話は飛びますけれども、先の1680年の延宝の大飢饉のとき、アイヌの人たちと交易するのに秋アジ100尾に米30kgだったものを、とにかく米が来ないから、米は1石2斗、18kgで勘弁してくれと、アイヌの人たちを説得した。アイヌの人たちも、それじゃやむを得ないと納得して、米の量が60%に減りました。ということは、アイヌの生活自体が60%に減ったということです。それで、今までは対等の交易相手だったのが、アイヌの人が60%貧乏になったために、場所請負人はアイヌの人を見下げるようになった。それと合わせて、場所請負人が、自ら鮭漁に乗り出すようになって、川口、あるいは沖合いで獲りますから、川に上ってくる鮭が少なくなる。交易の米は6割に減らされる。魚は上ってこなくなる。しかたなしに、漁場へいって稼ごうとなる。ところが場所請負人のほうでは、本州から漁夫を連れてくると、春から秋まで8両から30両ぐらい。年代によって違いますが、まあ8両というと、最低1年間ぐらい食べられるぐらいの金は払わなきゃならん。それで地元のアイヌを使おうとしたんです。しかし、使っちゃいけないという布令があります。本州ではなかなか漁夫が集まりません。このまま魚をむざむざ捨て置くのは、お

国のために、非常にもったいない。魚を本州に送り、国のために役立たせるために、現地の蝦夷人を使うことを許してください、ということになって、対等な交易相手だったのが、場所請負人の労働者に成り下がってしまったわけです。

あわせて、今度は魚カスの生産を始めました。天明年代というだけで、何年から始めたか、はっきりわかりません。それから、場所請負人が自ら漁業に乗り出したのも、宝暦年間だろうということなんですが、現在残っている資料では、1730年代には、まだ場所請負人は漁業に乗り出しておりません。しかし1784年になりますと、小林屋宗九郎が石狩場所の請負をして、自ら漁業を始めたということですから、だいだい宝暦年代の1760年頃だろうということになっているわけです。大事なことは、天明の大飢饉の後は、鮭100匹に対して、8升どころか、国後あたりでは3升のところもあったというんです。3升といいますと4.5kgですか。もちろん交易というよりも、それが労賃の代わりになっているんです。労賃は、だいたい春ニシン、夏鱒、秋鮭。200日働いて、石狩の場合ですと、アイヌの場合は2両でした。先ほど言いましたように、和人は8両から30両ですから、和人の10分の1ですね。それが他の場所は、だいたい8升俵で20俵。1石6斗ということになります。12kgの20倍、240kgですね。今買うとしたら、8万円ぐらいです。これは飯場付きですから、食べた他ですが、200日働いて、今のお金にして8万円。家族手当より少ないですね。

そういった矢先に、ロシアが、この北辺の地を覗ってきたということで、田沼意次が、アイヌの救済と北辺の警備の状況を調べに、普請役たちを蝦夷地に寄越させたんです。ところが天明5年に、将軍の家重が死んで、田沼意次が失脚しました。これに取って代わったのが、現代はどう教えているか知りませんが、私たちの時代は名君といわれた松平定信です。私は東京の深川にいたんですが、その隣町が白河町です。そして、区役所のすぐ隣りに、白河楽翁の墓がありまして、それで、ここが白河町というんだなと納得した記憶があります。

この松平定信は、八代将軍吉宗の孫ですから毛並みはいいわけですが、もう蝦夷地なんかどうでもいい、徳川家の礎を固めるのが大事だということで、今の小泉さんではないけれど、大改革をやったわけです。青島俊蔵という普請役が呼び帰され、牢に入れられて死亡してしまった。蝦夷地に行ったばっかりに、ロシアと密貿易していたんじゃないかと。というよりも、坊主憎けりゃ袈裟まで憎いということで、田沼意次とか勘定奉行をやっていた松本秀持などの指図で、蝦夷地に行って、蝦夷人を助けようとしたのが、腹立ったわけですね。最上徳内まで一時牢に入ったけれども、竿取り役、下男みたいものですから、まもなく出された。それに関連して、田沼一派は全部追放されてしまったわけなんですね。

ところが、我々は、田沼は悪い奴だ、松平定信は名君だと教えられていたんですが、その悪いはずの田沼が、14年何ヶ月間か老中をやっている。明治維新以来、民主主義になったけれども、日本で10年も総理大臣をやった人はいないですね。名君といわれた松平定信は、たった3年8ヶ月で辞めさせられているわけです。そんなことは、学校で先生は教えてくれなかった。立派なことだけしか教えてくれなかったですね。田沼意次は日本の国全体のことを考えていた。そしてアイヌのことまでも目を届けさせていた。松平定信というのは、徳川家の安泰しか考えていなかったということが、最近になって再評価されてきています。

これは高倉先生方なんかもずっと前から言っておられたことなんですが、田沼意次の政策がそのまま続けばよかったんです。松平定信は蝦夷地を投げてしまいました。そのために、蝦夷人は、ロシアの方になびいたんです。釧路や厚岸のほうの人も、ロシア人がいたウルップ島まで、わざわざ行って、交易をしていた。松前藩は、これを見て見ないふりをしていた。ということは、アイヌの人たちを通じて、満州とかロシアの品物が入って来る。それが回り回ってですね、松前藩のほうに行くわけです。それで、見てみないふりをしていた。

釧路のアイヌはどうかって言いますと、同じ鮭100匹を和人に渡すと、たった米8升しかくれない。1800年に入ったらです。ところが、ロシアへ持っていくと、相対ずくで、米じゃないですけれども、米2斗値のものをくれる。パンとか毛皮、サンタン錦など。和人と交易をするよりも、ロシア人と交易したほうが、アイヌの人はずっと利益があったわけです。そのために、その品物が、松前藩を通じて日本のほうへ流れていくという結果になったわけですね。最近、秋辺得平さんが(社)北海道ウタリ協会の副理事長になりましたけれども、たしかあの人は千島の出身だったとお聞きしてます。秋辺さんもこう言っております。俺たちの国は和人に取られたんだ。先祖は、散々、和人に搾取されて、今度はロシアに土地まで取られてしまったというわけです。本来ならばアイヌの人に返してくれるべきだと話しております。

これも、雑談になりますけれども、釧路の弟子(てし)さんという方は軍隊に入り、お国のためだと思って一生懸命働いた方です。アイヌの人です。この人が、領土の問題で当時、ソ連の札幌総領事館に陳情に行きました。そうしましたら、総領事は「わしらは日本には返さない。だけど、アイヌになら返してあげますよ」と言ったそうです。私と二人で、一杯飲みながらの話ではありません。100人ぐらいいる前での話です。だから、事実だと思いますね。

結局、日本では、こういったアイヌの人たちをいじめてばかりいたことを、学校ではさっぱり教えていない。アイヌは、狩猟(採集)民族だから、貧乏するのは当たり前だというような教え方をしていたわけです。そうじゃなくして、交易の不平等でもって、貧乏させられたということです。

1789年、元号で言うと寛政元年、クナシリメナシの蝦夷が蜂起しました。和人73人を殺したんですが、和人が悪かったんです。昔、30kgくれたのが、4.5kgしかくれない。このままじゃ、俺たち、殺されるということで、立ちあがって、悪い奴を殺した。ですが、日頃アイヌの人たちを面倒

見ている人は助けているんです。助けられた人間がいたので、はじめて事件が起きたことがわかったんです。そして、松前藩が、鉄砲を持って、出陣してきました。新井田孫三郎という、家老格が大将となってきました。そこで、釧路、厚岸のイコトイとかツキノイたちが、鉄砲と弓じゃ、到底勝ち目がない、降伏しろと言って、クナシリメナシのアイヌは降伏しました。そして、急造りの牢屋へ入れられ、牢の中でワーワー騒いだ。これはたいへんだということで、鉄砲で降伏した37人のおもだったアイヌを皆殺しにしてしまった。国際法はまだなかったんですが、これははっきりいって法令違反です。本来ならば幕府の裁断を仰いでやるか、そうでなければ、幕府なり、当時の総乙名たちでもって裁判所をつくり、裁判して処分するのが本当ですね。蝦夷地は外国です。しかも、降伏してきた人間を一方的に殺すなんてことは、許されないことです。手向かっていって鉄砲に当たったなら、これはしょうがないけれど、どこに降伏した人間を皆殺しにするということがありますか。何百年も前の戦争にしたって、城攻めにしたって、降伏した人間はみな許しているんです。大将は別としても。その時の状況は、皆さんの中でもお読みになった方はいらっしゃると思いますが、細々と書いています。それを見ても、場所の番人たちが、いかにアイヌの人たちをいじめたかということが、ありありとわかります。

そういった、アイヌの人たちが非常に苦しんでいる、存亡の危機に立たされたというような時代に登場したのが、松浦武四郎です。ただここでは、アイヌの人たちは、特に近現代、明治以降、大半が貧しい暮らしとなり、和人から見下げられていた。けれどもこれは、決してアイヌ自身に、民族自身に力がなかったわけではない。先祖は何百年となく、それこそ2万年も3万年も昔から、ずっと蝦夷地に暮らしていたわけです。それなりの生活の知恵があった。それが、たかだかここ100年か200年の間に、急に貧乏になってしまった。場所請負制度という悪弊と、松前藩の取締りが悪かったことによって、貧しくさせられたということを理解していただければ、幸いだと思います。

松浦武四郎は、三重県の津市と松坂の間の、今、三雲町という人口1万人の町の出身です。私が行ってから、20年になりますが、面積は20平方km。4kmに5kmぐらいですね。このへんのちょっとした町村の市街の区域ぐらいの町です。10年前までは三雲村でした。黒宮町長は、さっきみたいに、冬のアイヌ盆踊りで、一番先に飛び出してくるような、発想の鋭い町長ですが、一番先に行ったときは公民館だけがありました。北海道から変な奴が来たという感じで、教育長はじめ村の古老、70、80歳の方々、30人ぐらいがずらーっと並んでいて、びっくりしました。なんでいらっしゃいましたかと聞かれ、実は松浦武四郎という人の生まれ故郷ということで、武四郎が書いたもの、あるいは品物を見せていただきたいと思って来ましたと答えました。私は3人で行ったんですが、夕食会になりましたら、村の人は威張っておっしゃいました。うちらの村は、一番先に文化施設をやる。公民館を建てたら、次は学校を建て、下水道をやる。それらが一応揃ってから役場を建てる。もうかかってるんだけど、村で下水道を完備するっていうのは、三雲が最初でないか。そういう私の町では、町ですけれども、ようやく、あれから20年経って、これからやり始めるところです。三雲町から比べると20年遅れということになりますね。

そういった町柄でして、公民館へ行きましたら、驚いたことに、教育委員会は職員5人です。教育長、教育課長、社会教育係長、学校教育係長、それから兼任の女子職員が1人です。役場は、明治時代に建ったような古臭い、土足で入っていくところです。2階建てでしたけど。少し曲がってました。入ったところに、助役がおりまして、総務課の職員というと5人でした。人口1万でこじんまりとしているから、やれるんですね。20年前、私の町の総務課だけでも、10人やそこらいたんじゃないですかね。それから毎年のように行ってますけれども、去年行って、教育委員会は今、何人ですかと聞いてみますと、教育長と教育課長、生涯学習係長、管理係長と兼任一人。それしかいないと言うんです。町資料室が、公民館の2階にあるので、そのついでに顔を出したんですが、やっぱり5人でした。うちの町でさえ今、7、8人いますね。三雲の4分の1の人口で。土地が広いし、学校も2つか3つあるということで、仕方ないんでしょうね。それは抜きとしまして、そういった土地柄であるわけです。

武四郎は四男坊に生まれたんですが、16歳、今なら高校1年生のときに、ポイと家を飛び出したんです。全国を放浪して、長崎から平戸へ行き、20歳ぐらいのとき坊さんになって、小さな寺の住職になりました。今年の3月の末に、九州に行ってきましたが、その寺、千光寺は今もありました。24、5歳で寺の住職になったというのは、たいしたものですね。実は、長崎に行っているうちに、朝鮮へ密航するつもりだったんです。そして、壱岐まで行ったんですが、取り締まりがうるさくて密航なんてとてもできるような状態じゃない。宗対馬守なんて、日本の幕府よりもむしろ、朝鮮と仲がよかったくらいですから。

諦めて長崎に戻ったときに、蝦夷地がロシアやアメリカに狙われているという。今度は、目を北方に向けまして、1844年に、青森の三厩（みくりや）まで来た。高野長英をご存知ですね。牢に入れられたのが脱走し、その詮議が厳しくて、とても松前へ入れなかった。そこで、津軽で蝦夷語を勉強したりしながら、ぐるっと回って、1845年に初めて蝦夷地へ渡るわけです。しかも、蝦夷地は先ほど言いましたように外国ですから、松前藩の許可なくしては入れません。それで、運平という名前で、場所請負人の使用人ということになって、東蝦夷地、いわゆる太平洋岸を探索するわけです。その翌年には、日本海沿岸とカラフト、オホーツク沿岸を調べています。それからさらに、嘉永2年には、国後、択捉を調べ、蝦夷日誌という35巻の本を著しているんですが、これは、最初の本格的な蝦夷地誌、地理歴史書です。松前藩の歴史とか、そういったものは松前家にありますが、蝦夷の地誌というのはなかったわけです。35巻の蝦夷地誌は現在の本にして1260ページ。これは3分冊にして一昨年の12月に発刊されています。

その後、これを幕府に呈上し、松浦武四郎というのはたいした者だ、第一の蝦夷通だということになり、幕府のお雇い、いわゆる嘱託になりました。安政3年、1856年から、57年、58年と3回にわたって蝦夷地をくまなくとまではいかないけれども、主な川の中流あたりまで登り、アイヌの人たちが住んでいないところは、その土地のアイヌの人たちに聞いて、川上の様子を知っていった。先ほどの35巻を含めますと、155巻の蝦夷日誌、その他に、それを要約しダイジェスト版的にしたものを28冊出してます。それから、最初の蝦夷地形図、全部合わせると、この会場の半分ぐらいになる蝦夷地図を作っています。だから、間宮林蔵あたりが以前に作ってますが、それだけ大きな詳しい地図は、最初です。間宮林蔵の作った地図は、地名が約6000。松浦武四郎の作った地図は、今はっきりわからないですが、9000から約10000載ってます。精度も間宮林蔵に比べて、倍近く詳しくなっております。そういった業績を残した人です。

それから、この日誌の中には、アイヌの人たちのほとんど一人一人の生活態様が書いてあるんです。これは明日でもお話しますけれども、これが特徴的な面です。話が、半端になりましたが、続きは明日にします。質問の時間を設けていただきたいということですので、お受けします。

質　問：お話の前段のところで、鮭と米の交換比率が、米2斗、1斗2升、8升というふうに、だんだん交換比率が下がっていくわけですが、その時に、全国では米の生産高が増えています。これは、本州のほうで経済構造が変わってきたからだと思うんですが、アイヌの人たちも、その辺の事情は当然知っていたと思うんです。それが、一気につめられていくというのは、彼らは当然、理不尽なことと感じてきたと思うので、そのあたりの事情を伺いたい。特に、本州では米の値段が上がっているということは、鮭の値段も当然上がっているわけです。鮭一本の値段と米の値段を比べた場合に、最初の方と後の方で、為替との差、差損というかは、どのぐらいあったのでしょうか？

秋　葉：おっしゃる通りなんですが、実は、1700年の段階で、アイヌはもう従属させられたということですね。米が増えているのに、アイヌの人たちの生活は60%、40%に減らされた。その儲けは全て場所請負人に入ってしまったということ。そして、大事なことは、「しきたり」ですね。今年が大凶作であっても、その影響が及ぶのは翌年ですから、2、3年の間というものは、元に戻られないわけです。2、3年、1斗2升なら1斗2升になると、場所請負人は、そのままほっかぶりしちゃうんです。しきたりじゃないか、ということになってしまう。従属されているから、仕方ないんです。それで、戦うにしたってもう、どうしようもないです。

いい例が、戦後に取引高税というのがありました。吉田というワンマン首相がいて、どうしても必要だからということでやったけれども、3年かそこらで止めました。今は、消費税ですか。消費税もこれこれこういうわけだからと、国民はおとなしいですね。3%、はいはい。3年ほど経って、それが当たり前になった。しきたりになったらその後、5%に上げてくれました。国民は怒っていますか。それと同じで、アイヌの人たちは、だんだん窮乏のどん底に落とし入れられたわけなんです。こういったことを放っていたら、今の我が国もなりますよ。儲けたのは誰ですか。そのお金はどこへいったんですか、ということです。昔からこういうことはあった。そのようなわけで、アイヌ民族は存亡の危機にさらされたんです。

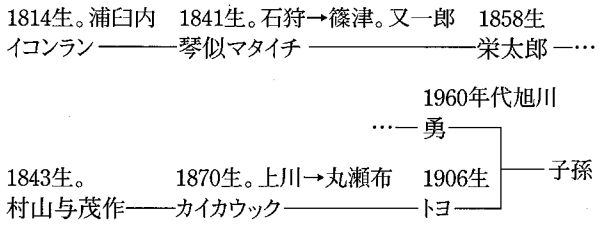
質　問：松浦武四郎の著作を集めたいのですが、既に全部読めるような、いわゆる活字本になっているんでしょうか。その点をちょっと教えてください。

秋　葉：吉田武三さんと高倉先生と私とで、日誌類は一応全部出てます。若干、出ていないものもありますが、出版社の意向です。現在は、手控が38冊あるんです。細かい字で書いている、いわゆる雑記帳ですから、思ったことがどんどん書いてあり、読むのもたいへんだけど、注釈つけるのもたいへんだということで、だいたい4分冊になって出る予定なんですが、今年あたり1冊出るか出ないか、今、四苦八苦しているところです。その他に調べてみて活字化されていない本があれば、おいおい出すだろうと思います。〔手控は10月に第一分冊刊行〕

質　問：今日の資料にはないんですけれども、私は琴似に住んでいまして、琴似には琴似マタイチという人がいたということなんですが、そのマタイチが、浦幌町史に出ていたようなんです。浦幌から琴似あたりへ移り住むような可能性というのは、どうなんでしょうか？

秋　葉：琴似又一という名前は知っています。今、子孫は旭川か札幌にいるはずですね。旭川の人で、トヨさんという琴似家へ嫁さんに行った人と何回か私は会いました。浦幌なら十勝アイヌですね。十勝アイヌと上川アイヌは、交流がありました。行ったり来たり。ということは、十勝でいじめられると上川へ逃げて行った。上川の人を石狩で、こき使うようになると、上川のアイヌの人が十勝まで逃げて行ったという例が、武四郎の日誌には全部、名前入りで出ています。琴似マタイチというと、明治の人ですから、その時は子供だと思いますね。マタイチの名が武四郎の日誌に出ているかどうか。ちょっと今は思い出せません。

〔追　補〕



質　問：場所請負制に関してなんですが、請負人がアイヌの人々を労働力として使い始めるというところで、幕府の側からの規制はなかったのですか？どうして強制労働になったのでしょうか？

秋　葉：それが、はっきりしたことは載っていないけれど、武四郎の著作によると、人口の2割を使っているんですね。ですから、だいたい、2割を限度として許可したんだろうということです。

上川の蝦夷人を使った原因は、先ほど言った手控の中に、石狩は2800人いたのが、1817年の疱瘡で800人死に、あと900人が病人。このままでは石狩の漁業がやっていけません。それで、上川には石狩場所のほかに500人の夷人がおります。これを何とか使うことを許可してくださいという文書が載っているんです。そういうところと合わせると、幕府や松前藩に使うことを許可され、それが習慣になった。

そして、出稼ぎも二通りあるありました。武四郎も書いていますけど、取られたっていうのは強制出稼ぎ。それから、自分の意思で働きに行くのは、自分稼ぎです。強制出稼ぎは、戦時中の徴用みたいなもので、安い賃金で働かせた。戦前までのたこ部屋のたこは、蝦夷人を使ったのを真似したんじゃないかと思います。強制労働のたこ部屋にも、自分の意思で働く信用人夫というのがいました。それと同じような状態ですね。

それから、モンベツ御用所文書というのが道庁赤レンガにあります。その中には、どうか、これだけの夷人を貸してくださいと、紋別御用所に出した文書があります。そういったものを全部調べていくと、いくら使っていたかというのが出て来るのではないでしょうか。

2

昨日に引き続きまして、お粗末な話を続けさせていただきます。昨日申し上げた中で、場所請負人のことを、敵みたいにクソみそに言いましたけれども、これはアイヌの立場から見た場合であって、日本の国全体としては、米の増産に示されているように、非常に功績があったわけです。国を富ますためにですね。ですから、今でも港町に行きますと、何々屋と、その町なり市なりの功労者的に挙げられています。それで、私も場所請負人の子孫の方と何人かお付き合いしている。また、去年は、藤野家の本家である近江八幡にも行って、屋敷も見てまいったりしています。まあ、100年200年前の話で、あなたの先祖はアイヌをいじめたんだから付き合いはしない、ということにはならないわけですよね。ただ、そういったことを、再び繰り返してはいけないということへの戒めです。歴史の歯車は戻ってこないですが、そういったようなことで、歴史の存在があるわけなんです。

それと、このレジュメの中に「シサム、シシャモ、シャモ」と書いてます。これは旭川のエカシ荒井源次郎さんから聞いた話、それから、釧路の通辞をやっていた豊島三右衛門という人の書いたものなんかを参考にしています。1600年代ころはシサムの交易船を宝船として歓迎、待っていたということです。それが、鮭100匹に対して米が2斗から1斗2升に減ったことによって、アイヌの人たちは40％搾取され、シシャモみたいに痩せ細った身を、いわゆる和人にぶつけたわけなんです。和人に対して魚のシシャモです。和人の大半は、これは言葉の訛りだろうと受けとっていたようです。

それから、近現代、我々もシャモ、シャモって言われましたが、シャモっていうのは、アイヌたちが奴隷的な境遇に陥れられ、ウタリ（仲間）同士でもシャモのように喧嘩をしたりする。「このシャモめっ」というようなことで、悪い奴の代名詞にしちゃったわけです。それを和人にぶつけたんです。それで、シャモ、シャモっていうんですが、荒井さん曰くには、今の若いアイヌは、それを知らずに使っている者もいるだろうから、シャモと呼ばれても、あまり怒らんでくれと。本当に軽蔑してシャモという人はあまりいないだろうと思います。

こういったことで、和人にいじめられた過程で、シサムから魚のシシャモ、それから喧嘩鶏のシャモというのに変わったということです。

それからレジュメの別紙ですね。1733年に、初めて船でもって石狩川の秋アジ漁を請け負う。これは船運上と言いまして、場所請負と違って、秋アジを獲ることを請け負ったということです。それから1739年の石狩海岸、これは蝦夷商賈聞書、この後のセミナーの田端先生のテーマにもなっているようですが、この中で、松前内記殿、上ツイシカリ江別と書いてあります。場所を入れたのは、実は、松浦武四郎著作の中に、場所境目取調書上というのがあるんです。武四郎の自筆本を読みますと、この中でシノロというのがあるんですが、別紙にシノロ、深川って書きました。今から7、8年ぐらい前ですか。後にみえる田端先生が、どうも篠路というのは借用地名らしいと言っておりましたので、武四郎の著作をいろいろ調べましたら、現在の雨竜川、深川近辺あたりのこととわかりました。上川は石狩の13場所のほかですから、石狩場所の中でシノロが一番遠い。それで、一々あそこまで交易に行ったりするのが面倒なので、シノロの番屋を、この札幌に持ってきた。2、3ヵ所移転してますが、シノロの番屋があったということで、そこに篠路という地名が定着しちゃったんですが、シノロのルーツは、雨竜川、深川市近辺だということが言えます。

これは、現代でも通用しまして、私の町に営林署の直営事業所がございました。上武利事業所です。この山の木がなくなると、この事業所は湯ノ沢というところへ行く。しかし、湯ノ沢事業所にならず、やはり上武利事業所。また分岐というところへ行っても、上武利事業所のまま。長年そこで事業をすると「分岐」の地名は消え、「上武利」になるという例があります。それから地名の例は、虻田町があります。本来は、伊達市の境目のほうに虻田川という小さな川があり、そこに会所があったので、虻田会所と称して

いた。文政5年にウス山が噴火し、フレナイというところに虻田の会所とアイヌ全員を移したわけです。そして、とうとうそのフレナイの方に虻田が定着しちゃったんです。面白いことに文政5年から安政年間に至るまで、33年ぐらい経ってます。けれども、武四郎の残した人別帳写が、33年経っても、フレナイ人別と、虻田の人別とが、別になっているんですね。それで、但し書きして、虻田人別は元、虻田にいた人間ですよ、ということになっている。こういう例はたくさんございます。宗谷も紋別も、太平洋岸では浦河、沙流もそうですね。沙流も結局、門別のほうへ沙流会所が移ったというようなことで、あちこち地名が移っております。

本題に入りまして、1800年代になりますと、アイヌは従属化します。使用人と雇い主の関係だったのが、場所支配人・番人たちが段々図に上ってきまして、奴隷化的な境遇にアイヌの人たちは陥るわけです。石狩では1817年2月から1818年4月まで痘瘡が大流行しまして、17年に2834人いたうち、833人が死亡した。その他に900何人が罹病している。昨日言いましたように、2800人の人口がいたとしますと強制労働に使える人間が560人となります。端数は切って2800人から800人引くと、2000人で、2割をみて400人を強制労働に連れて行けるんですけれども、そのうち900人は病人でこれも死亡しますから、残りは1100人です。しかもそのうちの半分は女性で、その中には子供も老人も入ってますから、400人どころか200人ぐらいも難しい。そうすると石狩の漁業が立ち行かなくなるわけです。

それで、文政元年の痘瘡が終わって間もなく、一段落したところで、文政元年8月に、石狩請負人の阿部屋伝兵衛が松前奉行宛に文書を出します。このままでは到底、石狩の漁業をやっていくことができず、せっかくの有数な秋アジ場をみすみす捨て置かなければなりません。それで上川の550人ほどを鮭漁に使わせていただけないでしょうかと。その文書は、武四郎の手控の中に全文の写しが出ています。これに対する松前奉行の回答書は見当たりませんが、おそらく、却下したんじゃないかと思います。石狩場所において、上川の人間を使っちゃならないということで。

ところが、文政5年(1822)に、各場所の経営を松前藩に返しました。しかし、松前藩にしても、おいそれと上川の人間を使ってよいということにはならない。おそらく場所請負人は、賄賂を使って、見逃してくれというようなことをして、表面は合法的に上川の人間を順次、石狩人別に入れてしまうわけです。安政期になると、実際は上川に住んでいるんですが、逐次、上川の人間を石狩人別にして強制的に使い、帳面上では上川には一人もいなくなったということです。

それで松浦武四郎が調べましたところ、石狩13場所で、文政5年、松前藩に場所を引き渡したときの人口ですが、痘瘡の後ですから2800人が1100人と半分以下に減っています。上川の人口は75軒527人おりました。これを合わせますと、407軒、1685人になるわけです。これを石狩にいるようにして、1685人の2割、360人ぐらいを強制出稼ぎに使っていたのではないかと想定されるわけです。それから33年後の1856年には、わずか655人に減ってます。40%です。ひどいですね。

アイヌの人の生活レベルが1700年ごろに比べて、40%に減ってますね。この表で見ます。両替から、賃金から、交易から、全部合わせて、40%に低下している。上川と石狩13場所を合わせますと、1600人の人口がやっぱり40%に減ってます。強制出稼ぎに行きますと、ここにも書いてますが、春ニシン、夏マス、秋サケ200日稼働で、食事のほか給代2両、今の72,000円ぐらい。これは安政期の両替です。和人はこれに対して8両から30両。支配人とかになると、40両から60両ぐらいの給料です。例えば20両としましても、72万円。今の国民年金が72万円ですから、出稼ぎした和人の200日稼働の標準がそれぐらいあったということになります。

それからメノコ(アイヌ女性)の妾化。武四郎調べによりますと、安政4年石狩で38人のメノコが和人の妻か妾かにされています。人口660人の半分、330人ぐらいが女ですね。これは、おばあさんから子供まで含めてです。番人たちが自分の妻、妾にするとなると、きれいな、年頃の女性を求めます。60のおばあさんをお妾さんにすることはないですね。38人、女性の1割以上は番人に取られているということです。そうしますと、大事なことは、アイヌ側の男性は結婚相手がいない。つまり独り者の男性が38人いるということです。そして番人に取られている女性が、何人子供を産んでいるかと言いますと、5人で11人子供を生んでいます。だいたいはその場の慰み者。

これは、幕府の蝦夷地の蝦夷人の保護政策が裏目に出たんです。1760年頃、場所請負人は漁業に乗り出した。ところが、船は風まかせです。秋鮭を獲っても、風がなければ鮭を塩蔵して、標津とか、あるいは石狩とか、天塩とかに冬囲いする。そうすると番人がそこに残って、それを番をしなきゃならないようになるわけです。一方では、蝦夷地へ勝手に和人が入ってはいけないということに、それ以前に決められています。家族連れで越冬をすると、和人がその土地に居座ってしまう可能性があるわけです。それで、和人は女性を連れて蝦夷地へ入っちゃいけない。蝦夷地は女人禁制です。女の人が、積丹半島から奥へ入ると、アイヌの神様が怒ってやきもちを焼いて、船が難破するという伝説になった。それから、オショロタカシマ、及びもないが、せめてウタスツ、イソヤまで、と歌にありますね。これは、自分の旦那が、石狩とか増毛とかへ行って、越冬して帰って来ない。旦那が恋しいのを歌に託したものだともいわれています。ところがやはり、番人だって男ですから、その性欲のはけ口を手近にいるメノコに求めた。これじゃいけないということで安政3年に幕府の役人は、なるべく家族を連れて行けという布令を出しますが、時、既に遅しです。

メノコが妊娠するとメノコを孕ませたと、仲間に冷やかされるので、堕ろさせる。ですから、38人もの妻妾がい

ながら、11人の子供しかいないということを、松浦武四郎は書き残しているわけです。普通ですと、男38人・女38人のカップルがいれば、1人3人平均としても、100人ぐらいの子供はできるはずです。この76人の男女が全部亡くなったと仮定すると、あとに11人しか残らない。そうすると65人の減損。たったこの世代だけで、65人の減損になるんですね。そういった時代を繰り返したんで、たった33年間の間に、人口が40%に減ってしまったわけです。

その女性が病気になると山へ帰してしまう。お前はもう用事がないから帰れと。米一粒、薬一服あたるわけじゃない。20歳、30歳の女性が山の中で病気に苦しみ、もはや私は死ぬほかないということを、武四郎は「その様、目を当てられざるなし。一人涙を拭いて去る」と随所に述べています。持参の米でおかゆを炊いて食べさせ、あるいは持ち合わせの薬を飲ませたりしても、スズメの涙の効果しかありません。次から次と、じいさん、ばあさんやら、若い娘まで死んでいっているわけです。安政4年の時点で、出稼ぎに取られているアイヌ、メノコは、131人。655人の20%に当たります。

また、武四郎の調べでは、655人のうち92人、約6分の1が、行方不明、死亡で、実際は563人しかいない。563人の20%ですと、112人ですね。112人しか連行できないのを、死んだ人、行方不明になった人まで含め水増しして、131人のアイヌを使っていた。勝手に何人でも使えるなら、水増しする必要はないわけです。そこで、だいたい2割が許されていた強制労働の限界じゃないか。それも男女を含めての20%ですから、ひどいですね。

それから、雨竜（シノロ）では、カニクシランケとか、セイコクとかが、天塩の領域の苫前のほうへ逃げて行ったのを、武四郎は日誌に書いています。同じ雨竜の人間でも、逃げて行かなかったカニクシランケの兄、弟たちは、人別帳には載っているんですが、全部、石狩に強制出稼ぎに下げられて、どこへ消えてしまったのか、その人たちの子孫は残っておりません。それで、たかだか33年間に、40%に人口が減ったのです。日本の人口は、昭和22年の臨時国勢調査で約7000万人でした。それが33年後の昭和55年には1億人。140%に増えています。ですから、1822年の24250人の蝦夷人が40%増とすると、約1万人増えて34000人ぐらいになっていたはずです。それが18805人ということは、およそ半数の生まれてくるべきアイヌが、日の目を見ずにあの世へ送られていったということになります。

現在の日本全国の町村ではほとんど例外が少ないほど、半分になった、3分の1になった、5分の1になったという具合に、人口が減っています。減っているけれども、それはその人口が札幌とか東京へ移動しただけに過ぎない。現在は1億2000万いくらになっています。けれども、これは蝦夷地、全道の蝦夷人の数ですから、江戸へ行ったとか、仙台へ行ったというわけじゃない。実際に減っているわけです。しかも自然でなく、人為的に減らされたのです。武四郎は、こういった様を見て、本来の任務は蝦夷地の山川地理取り調べですが、その他に植性とか、特に力を入れているのが、アイヌの人たちの生活態様。1軒1軒聞いて、自分の行ったところは、一人一人書いているんです。例えばこの家には、誰と誰と誰がいる。歳は何歳で、この内、何人が強制労働に引っ張られていると。それから、誰々は、誰の妾にされていると。

ちょっと余談になりますが、同じ妾でも妻にしているのもいたんですね。そのいい例が、間宮林蔵とか、石狩請負人代の村山林太郎、石狩支配人の能登屋円吉あたりですね。妻として、一緒に暮らしていたんです。但し、私が勉強不足で、村山林太郎なり、能登屋円吉に別に本妻がいたかどうかはわかりません。円吉は、村山、阿部屋伝兵衛の娘婿になった人なんですが、おそらくその妻は死んだのだろうと思います。そして自分の子供たちを育てるわけですから。村山林太郎の子供はヨモサクと言いまして、その子がカイカウック、これは丸瀬布に来て、住んでいました。その子才一郎さん（故人）には私も面識があります。はっきりと子孫に村山の姓を名乗らせています。能登屋円吉は武四郎の日誌によれば、アイヌの扱いが酷だったようで、くそみそに書いています。けれど、メノコを自分の妻としていたことは、人道的には当たり前だなと思っています。その子が能登岩次郎と三九郎。それから岩次郎の子供が、北海道大百科事典にも出ています、能登酉雄という人で、開拓学校へ入った優秀な子供と出てます。

それから間宮林蔵の娘がニヌシマツ。林蔵は他に妻がおりませんでしたから、アシメノコというのが、妻ということになる。子孫は間宮の姓を名乗ってよろしいということで、孫のヌサチウが、字は違いますが、間見谷を名乗っています。そして、旭川アイヌ協議会の幹部として、子孫の人たちは活躍しています。会長の間見谷喜昭さんです。間宮林蔵の故郷、茨城県の、今は伊奈町上平柳に林蔵の墓がありますが、女の戒名が3つ彫られています。ちょっと戒名までは忘れました。名前は書いてません。一番右側は明治3年10月19日死亡。その次は、文化8年2月19日。真中には「間宮林蔵の墓」、左側は戒名だけで何も書いてない。吉村昭さんの『間宮林蔵』という本があります。間宮林蔵の本は、たくさんありますね。吉村昭氏は、私どもの会員で、谷沢尚一さんという仙台の方（大正3年生）の方の資料を主に使って、あの伝記を書きました。そして、2番目の文化8年、死んだのは、これは許婚の女性だろうと思います。親が、林蔵が故郷へ帰ってきたら、この娘と妻合わせようとしていた娘がいた。林蔵が文化9年に来たところ、前の年、2月19日に、その娘は一回も見る事もなく死んでいた。それから、左側にあるのは、林蔵が文政8年に大病をしたときに、昔、伊能忠敬の下女だったのが寡になって、林蔵の見舞いにきた。一人暮らしですから、そのまま居着いて、内妻にしたリキという女性であろうと書いてます。

そうすると、明治3年に死んだのが誰か、谷沢さんも吉村さんもわからなかったので、それには一切触れていない。ですが、私は、間見谷家の先祖のアシメノコであろうと判断しています。そうでなければ、3人もの女性の法名を書くわけないですね。やはり、本妻と思っていた女性を右に書いた。その次には結婚しないで死んだ女性。3番目

は、林蔵が60歳を過ぎてから身の回りを世話してくれたリキという女性を。これは、林蔵の養子の間宮鉄次郎が建てたのではないかと思います。お墓には、いつ建てたとも、誰が建てたとも書いていません。鉄次郎は林蔵の後を継いで、箱館奉行所、開拓使の役人になっていますから、蝦夷地と関係があるわけです。林蔵の話も生きているうちに聞いているし、3人の女性に同情して、お墓を建てたのであろうと思っています。

ですから、間宮林蔵にせよ、円吉にせよ、村山林太郎にせよ、これは現在、外国の女性と結婚したのと同じわけですから、道義上は何も問題ない。ただ、一時の慰めに妾にして、子供が生まれるのを堕ろさせてしまった。あるいは病気をうつして死なせた。そういうのを、松浦武四郎は非常に怒っているわけです。武四郎は、こういった状況をつぶさに調べて堀奉行や村垣奉行と内談している。それで、1858年6月13日、箱館奉行所は石狩場所を直捌きにするわけです。大事なことは、武四郎はつぶさに見て、このまま放置しますと、あと4、50年を待たずして、アイヌの種と風俗、民族と文化は滅びてしまうでしょう。ご政道は、我々の預かり知らぬところですが、今、死のうとしているアイノはこれだけいるんですと、一人一人名前を揚げています。去年会った人間は、今年、行ってみると死んでいた。石狩の鮭漁を維持するため、6割ものアイノを犠牲にした。開拓は1日延ばしたところで、国の豊さがちょっと遅れるだけ。しかし、人間の命は失われれば帰ってこない。今、死のうとしている人たちの命を救うのもご政道の内ではないでしょうかということを、涙ながらに日誌の中で訴えているんです。

ところが残念なことに、この日誌が、安政の大獄とぶつかっちゃったんですね。箱館奉行にしたところで、こんなものを井伊大老に見せたらたいへんだということで、その日誌をお蔵入りにしたらしい。どこへ行ったかわからない。武四郎はどうもおさまらないわけです。それで、今度はそれをダイジェスト化して、おもしろく、ちょっとフィクションを入れて書いたのが、蝦夷紀行集というものです。石狩日誌、十勝日誌とか、東蝦夷日誌、西蝦夷日誌など28巻編あって、そのうち版本が出たのは18冊。それから活字本になったのが、私のやったのも合わせて、26、7巻出てます。ところが、紀行集には、ちょっと武四郎に関心ある人が読んでいると、羊蹄山へ登ったというのも、それから石狩岳、大雪山へ行ったというのも、支笏湖を渡ったというのも嘘だということがわかります。小説家が書いている、歴史小説みたいなものですね。だから、おもしろいけれども、これを資料として扱うのは危険です。中学校、高校あたりで、伊能忠敬、間宮林蔵、あるいは近藤重蔵のことを教えても、松浦武四郎は単なるもの書き屋、フィクション作家だというふうにとらえられていたんですね。

ところが、昭和50年頃になって、初めて幕府に提出した日誌の控えが松浦家に残されているのがわかりました。それが、やがて活字本になり、それでようやく松浦武四郎の人物像の見直しが行なわれてきて、しかもその著作、官庁言葉で復命書的な内容のものが155巻も数えています。それも、全道にわたっているわけですから、近世の自分たちの村や町を調べるには、武四郎のその日誌がないと、近世のことはさっぱりわからないということで、見直しが行なわれているのです。私が間違っていたら、教えていただきたいのですが、おそらく、松平定信は、蝦夷地のことは松前家にまかせておけばいいやと考えたんですね。幕末の大老、老中たちは、自分たちの足元が危ないもんですから、蝦夷地なんかもうどうでもよかったんですね。明治に入りますと、開拓使の薩摩の人は、蝦夷地のことはさっぱりわからないですから、とにかく北海道の開発だけに目を向けて、アイヌの人たちのことを、さっぱり考えていなかったんですね。

またもう一つは、ほとんどの人は、本州で食えなくなって、北海道へ来たわけです。本州で左団扇で暮らせるのに、北海道に土地を持ったというのは、華族様とか金のある人だけですね。一般の開拓者は、本州で暮らしが成り立たなくなったんで、仕方なしに北海道へ来た。北海道に来たら、ただで5町歩の畑をやるぞというだけで。政策的に、お前たちよりまだ下にアイヌっていうのがいるということを、特に啓発したわけではないけれど、陰で口で言ったんだろうと思います。お前ら、貧乏してもアイヌよりましなんだぞというようなことを。北海道の開拓は成功したけれども、アイヌの人たちは、1700年代以降、200年間搾取された挙句に、また、明治時代に入ってからも、その責め苦を担わなければならなかったのです。

私ごとの話になりますが、丸瀬布で昭和37年に、開拓古老座談会をやりました。12、3名あつまったでしょうか、70、80くらいの人たちです。そのときに、町議会議長が、そういえば、小学校の同級生に川村金次郎という、頭のいいアイヌがいたけれど、今、どこへ行ったのかなと言ったんです。そうしましたら、一番先に丸瀬布へ入植した畑さん、80何歳だったですが、ふいと口に出したんです。わしらは、川村さん方には世話になったもんじゃ。カワムラアイヌとは言わず、川村さん方と。そうしましたら、滝口さんという人が、俺らも川村熊吉さんたちから秋アジの獲り方を教わった。密漁に違いないけど、まさか、10里の道を湧別浜まで魚買いに行けない。獲らなかったら、栄養不足になる。そんなこと言ってられないから、秋アジの獲り方を教えてもらって、食べきれない身は肥料にした。筋子は、8升樽に2本漬けた。もっと漬けたかったけど、醤油を樽で買うだけの余裕がなかったから、2本ぐらいしか漬けられなかった。ほかの古老も異口同音に、薬草の見分け方、野草の食べ方、シナ縄の編み方、それから熊、鹿の獲り方、そういういったことをアイヌの人から教わったと。

それでようやく開拓が成功したんです。入植の最初は、着手小屋を建てます。拝み小屋とも言いました。これだって、ただ、笹の葉っぱを並べればいいってものではないらしい。この笹がいいとか、ここのところはこういうふうに並べるとか、作り方があるらしいんです。中には、うちの爺様はアイヌに世話になったとは一言もいわなかった、という方もあるでしょう。けれども、それは先に入った開拓者が、アイヌの人から教えてもらって、それをあとから

来た開拓者に教えてやったに過ぎないんです。やはりアイヌの人たちは親切に教えてくれたんです。それから、川向こうに入植した人が、国道まで出るのに非常に難儀していた。それに丸木舟を作ってくれた。2箇所も。私設渡船場を作ってくれた。私も聞いてびっくりしました。37歳になって初めてわかりました。

世間一般に、アイヌというのは貧しくて、後進性の民族だって、教えられていました。それが身にしみていたわけです。自分たちが貧乏している当時は、アイヌの人たちに世話になったということを、人にも、自分の子供たちにも恥ずかしくて言えなかった。ところが、自分はもうあの世からお迎えが来るのを待つばかりだ。家も建て替えた。昭和30年代に入ってからですね。かまどは、子供たちや孫に譲った。楽隠居とまではいかないけれども、年金制度もできて月に3万円ぐらいの小遣いもくれる。ありがたい時代になったわけですね、その当時は。それで、心のゆとりが生まれ、思い返して見ると、「アイヌの人たちに世話になったもんじゃ」というのが、本心として出てきたんですね。

私はそれがきっかけで、川村金次郎さんを探して旭川に行き、荒井源次郎さんや、姓が変わった清水金次郎さんに会って、旭川での交流ができたわけなんです。それで、丸瀬布には川村熊吉さんとか村山カイカウックさんといった人たちが、大正時代まで10何軒いたことがわかったわけです。自分たちは、シャモに虐待されたけれども、この開拓者には罪はないんだということで、困っている者を助けてあげるというのがアイヌの人たちの信条なんですね。

紋別アイヌの人別帳が残っているのですが、乙名や小使役になると、メノコを妾にしている例があります。人別帳では厄介女、つまり同居人となっています。例えば、オポンタカという小使役がいました。今のサロマ町です。それが紋別へ強制出稼ぎに引っ張って行かれたところ、そこに幼馴染の女性がいた。一緒に寝たか、あるいは単なる話をしただけか、とにかく、もとのメノコと馴染んだ。そうしたら、番屋守の清兵衛に呼ばれたと。そして、俺の思い女に馴染むとは何事だということで叱りつけられ、これを運上屋まで持って行けと手紙を宗谷へ持っていったんです。それを宗谷の通辞、又五郎という奴があけてみた。顔色を変え、オポンタカを逆さ吊りにして、水をかけ、棒で殴った。その手紙には、このオポンタカはわしの思い女のメノコに手をかけた不埒な奴だから、うんと懲らしめてやってくれと書いてあったのですね。そこへ常呂のレイシャクというのが来合わせまして、もしも、アイヌが、シャモの妻なり妾に手を出したとしたらば、これは咎められてもしかたない。けれども、アイヌがメノコに馴染んだとて、どうしてシャモにそれを裁く権利があるのだ。そうやって談判し、オポンタカは解き放されました。しかし、今度は利尻島へ遣られ、2、3年経って人別帳から消えていますから、死にました。そうして、その28歳の未亡人テシニヌが残りました。生活が成り立たないですね。それで、湧別のパウカアイノという乙名格が厄介女、同居人ということにした。妾とは書いてないです。そういった、生活に困ってどうしようもない者を、パウカアイノは養っていくような力があったんでしょうね。妻の他に2人の女性を養っていくわけです。これを果たして単純に、和人の社会にいる妾と考えていいかどうかです。困っている者を救うというのが、アイヌの人たちの本当の社会じゃないかと思うわけです。

現代ではもうアツシを着て、狩猟生活をやっているアイヌはいない。アイヌ語で日常生活をしている人もいない。アイヌ民族は和人の中に同化したと、誰かが言いましたね。私が見まわしてみたところ、オホーツク沿岸も、日本海沿岸も、千島も樺太も、アイヌの血を引く人はわずかに残っているけれども、4圏域のアイヌ文化と民族は絶えてしまった。辛うじて主に太平洋沿岸と上川は残りましたが。松浦武四郎は、これを予言し警告していたわけです。行政上、我々が税金を納めているのは、所得を倍増してくださいというんじゃない。それは経済団体の仕事です。税金を納めているのは、私の、俺たちの命を守って欲しい。子供たちの教育は自分でできないから、国でやってくれ、ということです。こういった民主主義を、まだフランスの近代民主主義が確立する4、5年前、松浦武四郎は言っている。歴史は帰って来ないんですが、アイヌ民族に犯したようなあやまちを二度と繰り返さないようにするために、皆さんとともに、これからも勉強していきたいと思います。2日間、本当にまとまらない話で失礼しました。

質　問：篠路中学校のものですが、一番最初に篠路のことが出てきましたけれども、雨竜で生まれたアイヌを札幌に連れてきたということですが、逆に、篠路の番屋の方にいたアイヌが雨竜の方へ移ってくるというか、そこに住むというか、そういうことが考えられないでしょうか？

秋　葉：武四郎の日記の中では、ここはシノロ番屋があるけれども、全部出稼ぎです。強制労働で今の篠路に連れて来た。深川辺りに行きますと、ここにはシノロ人別の何々という家があり、そこの家には誰々が強制出稼ぎに引っ張っていかれたとあります。ですから、ルーツは深川近辺ということです。雨竜の川上のほうは、安政年間に武四郎が行ったときには誰も住んでいません。ただ、こういった人が雨竜にいましたよと、今の添牛内のあたりに4、5軒住んでいたようですね。名前も出ています。そのカニシランケ一家は羽幌の方へ逃げていったために助かったけれども、雨竜や深川の大半が石狩の篠路へ強制出稼ぎに引っ張っていかれたけれども、消息がわかりません。

〔追　補〕文化7年は雨竜川口から一己までシノロ蝦夷138人がいた。それが安政3年は9軒、38人のみ【丁巳日誌五巻40丁】

質　問：例えば旭川市史によると、琴似さんという方が篠路から近くに移られたと書いてあるんです。

秋　葉：あぁそうですか。そうすると、雨竜の生まれかもしれませんね。琴似と書いてあるから、あるいは琴似の人物だったか。琴似家が、果たして上川アイヌだったか、あるいは石狩アイヌだったか、ちょっと今記憶にありません。
〔追　補〕琴似マタイチは浦臼生まれ、下カバタ人別。安政4年当時、石狩詰調役並水野の飯炊き。明治に入り篠路に本籍。

質　問：琴似さん自体は、新札幌市史によると、カイラというんですか、あのあたりの近くのほうに住まれていたと。その人はもともとは、先ほどの篠路の地名にあるように、元は雨竜のほうなのかなと、ふと思ったのですが。

秋　葉：琴似トヨさんという方は旭川の村山家からいった人で、私も会ったことがあるんだけど、そのルーツまでは聞いたことがなかった。
〔追　補〕琴似トヨさんは明治39年生まれ。昭和40年代は旭川に居住していた。

質　問：武四郎が1856年に雨竜を探検するときに、篠路の大人のエンリシウというのを連れて回ったということについて何か教えてください。

秋　葉：人別帳は篠路になっているけれども、強制出稼ぎの場所は今の篠路だったんですね。
〔追　補〕シノロ乙名エンリシウは、ベツパラ(深川)に住み、安政3年武四郎を案内したが、安政4年2月ごろ没(59)。妻はベツパラ住まい。長男イナオカントリは浜(シノロ番屋)へ取られていたが、明治9年当時は雨竜の一己に住居していた。

質　問：実際に住んでいるのは？

秋　葉：住んでいるのは、深川のほうが本拠地ですね。日誌に書いてます。

質　問：昨日の分なんですが、松浦武四郎の蝦夷地調査のことで、武四郎が幕府御雇になる前に、個人的に蝦夷地を探検して、いろいろ記録が残されているんですけれども、そのときの費用というのはどこから出ていていたのでしょうか？

秋　葉：それが謎なんです。あの人は伊勢の出身ですから、ちょっと神主の真似事ぐらいはできたらしいこと、それから篆刻、はんこを彫る技術があった。それと、昔、旅人っていうと珍しい。全国を回ってますから、旅の話を宿賃の代わりにしたんじゃないかなと思うんです。薬屋さんがいましたね。薬屋とか行商なんかも、うちあたりによく泊まりましたが、魚をちょっとおまけするぐらいでした。薬屋さんは紙風船を子供たちにくれるくらいで、別に宿賃なんかは貰わないんです。あちこちの面白い話を聞かせてくれ、家族と同じ飯を食べてもらった。それが、昭和の初め頃まで残っていたわけですね。だから、金がなくても旅行ができたんじゃないかと思うんです。

質　問：特に、パトロンみたいな出資者がいたということではないのですか？

秋　葉：そういうのは、なかったようです。よく聞かれるんですけど。私の子供の時代、宿賃貰っていた人はいなかったです。喜んで泊めていました。旅の話を聞かせてくれるから。

質　問：篠路の話に戻らせてもらいますけれども、雨竜の「シノロ」の意味は？

秋　葉：アイヌ語の専門家じゃないんで、言いたくないんですけれど、幌加内辺りは、アイヌ語でシンノウリウになります。本流の川上のことをシンノ何々、シノ何々。シンノユウベツが訛ってシユウベツになった。だから、シンノウリウ、シノリウ、シノロと、訛ったんじゃないかなと思うんですけれども、どうでしょうか。

質　問：開拓時代、アイヌから随分お世話になったという話について。私が付き合っている人たちで、「実は私の母親はアイヌのチセの前に捨てられて、そこで育てられた。それが私の母親なんだ」という人がいます。そういうことをあちこちで聞いているということなんですけど。やはり、開拓時代は随分、日本人はアイヌの人たちに、小さい赤ん坊を預けたという例があるようなんですが、そのような事実はどのくらいあるものなのでしょうか？

秋　葉：はて。私も、どこどこの誰々さんはアイヌの人に育てられたという話を聞いてますが、その事例がどれだけあるかは調べていません。アイヌの人たちは北の世界で生きる生活の知恵がありますから、飢え死にさせるよりは、アイヌの人に育ててもらいたいではないですか。悪い和人のために貧乏をさせられたけれども、食うだけの力はあったわけです。強制出稼ぎに引っ張られて、叩かれたりしてもですね。アイヌの家で育てられたという事例は、確かに私も聞いています。

質　問：先住権についてお伺いします。松浦武四郎の思想の中に今で言う先住権という概念か、その芽生えがあったのかどうか。

秋　葉：武四郎の時代、蝦夷地は松前藩の領地じゃない。蝦夷地はあくまでも蝦夷地ですよ。ただ、日本は日本人と同じにそれを保護する立場にあるから、本土人とか何とか差別しないで命を救ってやってくれということを言っているわけです。ですから、土地の先住権とか、土地を取り上げた、ということまでは言っていません。